



立野ダム総事業費1160億円に増額 384件のうち立野ダム推進意見は4件(1%)



申入書を国交省に提出 2020.6.18

報道によると、立野ダムの事業費が 243 億円増額され、1160 億円となりました。これまで国土交通省は、立野ダムの事業費を増額することはないと繰り返してきましたが、今回の増額に関する住民への説明は一切ありません。

熊本県は 1160 億円の 3 割 (348 億円) を負担することになります。2012 年の立野ダム事業検証の資料を見ると、他の治水対策案よりも 100 億円安いということで、国土交通省は立野ダム案を採用して

います。ダム以外の治水対策の方が、事業費の面でも有利だったのではなかったのでしょうか。

昨年、立野ダム建設を含む白川の河川整備計画が変更されました。10 月 23 日から 7 か所で開かれた変更原案の説明会では、住民から立野ダムの必要性や危険性について多くの質問が出されました。ところが国土交通省の担当者は「立野ダムに関する変更はないので説明しません」「担当者が来ていないので答えられません」「ご理解ください」を繰り返すだけでした。国土交通省が立野ダム建設に自信があるのならば、住民の疑問にきちんと、堂々と答えるべきです。



河川整備計画の説明会 2019.10.23

住民にほとんど周知もされぬまま、説明会と意見募集は 11 月 19 日に終了しました。その後、国土交通省熊本河川国道事務所ホームページ※に掲載された住民からの意見をみると、意見の大半が立野ダム建設への疑問や、今回の河川整備計画変更への疑問で、住民からの意見 (384 件) のうち立野ダム建設を求める意見は 4 件 (約 1%) しかありませんでした。このことから、立野ダムに関する民意は明らかです。

立野ダムは、放流孔 (幅 5 m × 高さ 5 m のダム下部の穴) が洪水時に流木等でふさがり、洪水調節ができなくなり、熊本市など下流にとって災害を防ぐどころか、むしろ危険です。ところが、住民が納得できる説明は、いまだになされていません。

当会では 6 月 18 日、「白川の災害対策については、住民の意見を反映したものとし、熊本県民に危険をもたらす立野ダム建設を即時中止すること」などを求める申入書を国土交通省立野ダム工事事務所に提出しました。

※アドレス: http://www.qsr.mlit.go.jp/kumamoto/river/shirakawa/shirakawa_kasenseibi/henkou.html

の中の、■ご意見募集についての「コチラ」から見ることができます。

●立野ダムをめぐる動き 2019年1月～2020年7月

- 2019 年 6 月 16 日 九州北部豪雨 7 周年シンポジウム「再考・立野ダム建設」で中島熙八郎熊本県立大学名誉教授が講演。(熊本市パレア 100 名参加)
- 10 月 23 日～ 白川の河川整備計画の変更原案に関する住民説明会(流域 7 か所で)
- 11 月 14 日 「白川の安全と立野ダムを考える流域住民連絡会」が国土交通省に「立野ダムによらない白川治水を求める意見書」を提出。
- 11 月 18 日 「異常気象から流域の安全を守るには」で香川大学の寺尾徹教授(気象学)が講演。(熊本市民会館大会議室 100 名参加)
- 12 月 14 日 坪井川遊水地(熊本市中央区坪井)見学会(20 名参加)
- 12 月 18 日 国土交通省、白川の新たな河川整備計画案を公表。「60 年に 1 度」の洪水
- 2020 年 6 月 5 日 国土交通省、立野ダム事業費を 243 億円増額し、1160 億円に。
- 6 月 18 日 国土交通省に「立野ダム建設中止を求める申入書」を提出。

●空前の豪雨で球磨川が大氾濫

7 月 4 日、球磨川流域は空前の豪雨に見舞われ、流域各所で氾濫。多くの方々が亡くなくなりました。被災された皆様、お亡くなりになられた皆様に、深くお見舞いお悔やみ申し上げます。

(1) 空前の雨量と球磨川の氾濫



災害翌日の人吉市九日町通り

地球温暖化がもたらす海からの多量の水蒸気が積乱雲を連続発生させ、線状降水帯となり、球磨川流域に長時間流れ続けました。今回のように、球磨川全域で桁外れの雨が長時間降り続くことは、かつてなかったことです。今回の災害は、地球温暖化による「人災」だとも言えます。

線状降水帯による空前の雨量で球磨川は短時間で満杯となり、各支流の洪水が本流にはけきれずに氾濫が始まりました。人吉の球磨川の水位は、観測史上最高の 5.05m(昭和 40 年 7 月 3 日)を大きく上回る 7.25m を記録。

青井阿蘇神社(国宝)の楼門や拝殿も 1.5m ほど浸水しました。1200 年の歴史を持つ同神社の記録に、浸水被害の記録はありません。今回の洪水は、雨量も洪水水位も過去最大でした。

これまで流域の山林の溪流も、農業用水路も、球磨川の支流も本流も、少しでも早く洪水を下流に流すために直線化され、護岸はコンクリートで固められてきました。ところが人吉盆地の出口は川幅が狭くなり、流れがはけきれないために、人吉盆地下流ではかつてない速さで洪水水位が上昇したと考えられます。

(2) ダムの緊急放流

人吉市など下流域が浸水しているさなか、球磨川上流の市房ダムは 7 月 4 日午前 9 時半から緊急放流を開始すると熊本県は発表。各報道機関は下流の住民に対し、ダム緊急放流による水位の急激な上昇から命を守る行動をとるよう、繰り返し警戒を呼び掛けていました。直前で市房ダム上流の降雨が弱まり、緊急放流はどうか回避できたようですが、ダムは緊急時には、流域住民の生命財産を奪うものであることが、改めて明らかになりました。



今回の洪水では、川辺川流域の降雨は球磨川本川の降雨と比べ、そこまで大きくなかったようですが、もし川辺川ダムが存在し、線状降水帯による今回のような豪雨が川辺川ダムの集水域を襲えば、ダムは満水となり、緊急放流をしていたのは明らかです。

今、ネット上では「川辺川ダムがあれば人吉の水害は防ぐことが出来た」というような宣伝を多く目にしますが、今回の球磨川水害の原因や地元の実情

を知っているのか、科学的な検証に基づいたものなのかと感じます。

(3) 今後求められる防災対策

線状降水帯による、これまでに経験したことがないような異常降雨が毎年のように各地で発生しています。地球温暖化が続く限り、このような豪雨災害は日本中どこでも起こりうることです。ダムと連続堤防で洪水を川に閉じ込めようとするこれまでの「治水」のあり方を根本的に変えるべきです。

今後は、どんな規模の洪水が来ても被害を最小限度に収める災害対策が必要です。国土交通省も7月6日、洪水や巨大地震に備える防災・減災総合対策を公表し、堤防やダムだけに頼らず、土地利用規制、避難体制の強化などを含む「流域治水」への転換を明記しています。「想定以上」の洪水で満水となり、緊急放流を行うダムによる治水は、必然的に今後の洪水対策から除外されるべきです。

白川でも球磨川でも、これまで少しでも早く洪水を流すために、山林の溪流から本流まで直線化が行われてきました。今後は、流域全体で洪水をゆっくり流すことで、下流への洪水の集中を防ぐ（洪水のピーク流量を下げる）ことが必要です。田んぼの貯水機能の活用※、水害防備林（樹林帯）の復活、浸水する可能性のある地区の嵩上げや移転など、総合的な地域づくりを進めていくことが必要です。

※田んぼの排水口や畔（あぜ）などに少し手を加えるだけで、流域の保水力が大幅に高まります。

●会計報告(2019年4月1日～2020年3月31日まで)

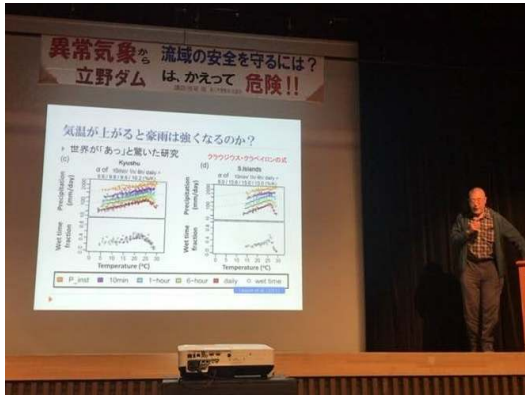
収入の部	金額	備考
繰越金	8, 3 0 9	
年会費・カンパ	4 6 1, 6 0 1	
合計	4 6 9, 9 1 0	

支出の部	金額	備考
郵送費	1 0 5, 2 4 2	会報発送、資料発送
事務用品費	4 0, 6 5 2	紙代、封筒代、プリンターインク代、コピー代
会場費	5 0, 4 9 0	パレア、市民会館
印刷費	5 2, 1 1 3	カラーチラシ印刷（1枚約2円）、印刷機使用料
その他	6 5, 0 0 0	講師謝礼交通費、高速料金
合計	3 1 3, 4 9 7	

(収入) 4 6 9, 9 1 0 - (支出) 3 1 3, 4 9 7 = (残高) 1 5 6, 4 1 3 円

最近の集会等にご参加いただいた皆様にも、会報23号をお送りします。当会は、皆様方の年会費（一口1000円）とご寄付のみで運営しております。今回、2020年度分の会費振替用紙を同封させていただきました。今後ともご支援のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

●異常気象から流域の安全を守るには？



講演する寺尾先生 2019.11.16

11月16日、「異常気象から流域の安全を守るには」と題する学習会を、熊本市市民会館大会議室で開きました。これまで多くの全国の豪雨災害について研究されてこられた香川大学の寺尾徹教授（気象学）が講演。約100名が参加しました。

寺尾先生は、「異常気象が増える将来を見据えた治水が必要だ」と指摘。神奈川県箱根町で過去最大となる24時間雨量942ミリを記録した2019年10月の台風19号など、過去の豪雨災害を解説。「地球温暖化の影響などで、過去に経験のない極端な豪雨が増加する傾向にある」「地域に合った災害対策が必要」と強調されました。

立野ダムは穴あきダムで、豪雨時に5m四方の穴に流木や巨石が詰まる恐れが指摘されている点には「国が示す安全性の説明は不十分だ」と強調されました。この講演会から8か月後、異常気象による空前の豪雨に球磨川流域が襲われたわけです。

講演に先立ち寺尾先生は、立野ダム建設予定地や白川改修の状況などを視察されました。

●坪井川遊水地（熊本市）見学会



12月14日、熊本市中心部の洪水を防ぐための坪井川遊水地の見学会を行い、約20名が参加しました。坪井川遊水地（面積56ヘクタール）は、立野ダムの半分近い毎秒83トンの洪水調節能力があるのですが、そのことはほとんど知られていません。当日は現地で生まれ坪井川の水害も体験された緒方紀郎さんが、

過去の水害体験談や遊水地の仕組み、越流堤、排水門、現地の自然環境の変遷などについて詳しく説明し、立野ダムによらない洪水対策について考えました。

編集後記 今回の洪水まで、私たちは「洪水が球磨川の堤防を越えることはあるまい」と思っていました。ところが今回は、その堤防を2mも3mも超える洪水が来たわけです。堤防を3mも超えると、ダムの非常放水と同じで、あっという間に水位が上がる一因にもなったと思います。何より堤防があることで安心していただけで、避難が遅れた例も多かったようです。私たち住民にとっても、これまでの経験が全く役に立たなかった今回の豪雨災害は、全くの「想定外」だったとも言えます。今回の球磨川の洪水は、雨量も洪水水位も過去最大で、国の想定（河川整備基本方針）を大きく上回っています。これまで国は、何十年かに一度起きると考えられる洪水を「想定」してダムや堤防をつくり続けてきました。しかし今回は、その「想定」をはるかに上回る、地球温暖化による空前の豪雨でした。今後は、どんな規模の洪水が来ても被害を最小限度に収める災害対策が必要です。ダムと堤防に頼るこれまでの治水対策の在り方は、一新すべきです。（N.O.）